

シャルムクリニック院長
櫻井直樹 先生

さくらい・なおき／静岡県沼津市出身。2002年東京大学医学部医学科卒業、同附属病院皮膚科へ入局。社会保険中央総合病院、佼成病院の皮膚科で研修後、2005年東京大学医学部附属病院皮膚科助手・助教。2007年国立病院機構相模原病院皮膚科、2008年メディカル・プラスクリニック、2009年湘南美容外科などで各種診療の研鑽を積み、2011年シャルムクリニックを開業。【専門】アトピー性皮膚炎、乾癬、レーザー治療、皮膚外科、美容皮膚科。

●

「簡単な道と難しい道があれば、あえて難しい道を選びなさい」私が、みずから診療姿勢の基本として貫してもらいたい教えです。日々、難しい症例に向き合いながら、患者さんのあらゆるニーズに対応しようと研鑽を重ねています。



シャルムクリニックは、千葉県松戸市に2011年に開業。ニーズに応えるべく、皮膚科・アレルギー科、小児皮膚科、美容皮膚科、形成外科、美容外科と多岐にわたる診療を提供しています。院長の櫻井直樹先生は、東大病院での勤務経験を踏まえ、「難しい症例も可能な限り診る」としながら、必要な場合の紹介が遅れることのないよう、日々、自身の皮膚科診療の知識とスキルの向上に努めています。0歳から100歳以上まで、1日300～400名もの患者さんを診るというクリニックの現状と、今後の展望についてお話を伺いました。

皮膚疾患の経験から皮膚科医に

私の実家は、長岡藩の御殿医を先祖とし、祖父の代まで脈々と続いた医師の家系です。しかし、祖父の子どもの代には医師がおらず、子どもの頃、夏休みに祖父の家へ遊びに行くたびに「いずれ医師に」と言われていました。そのため、いつのまにか将来像として医師を思い描くようになっていました。

また、私は、幼少期からアトピー性皮膚炎を患った時期があり、「医師になるなら皮膚科医に」とも考えていました。大学受験が終わると、ストレスから解放されたためか症状は消えましたが、その実体験をもって、今、アトピー性皮膚炎の患者さんに「自然と治ることもあるんですよ」と伝えることができます。「先生もそうだったんですね」とうなづく患者さんをみると、医師の言葉が希望につながることもあるのだと実感します。

治療法がなくても工夫する

大学卒業後、東京大学医学部附属病院に勤務すると、とにかく臨床の腕を磨くことに集中しました。とりわけ、皮膚疾患で頻度の高いアトピー性皮膚炎、乾癬に精通したいという思いは強かったです。

乾癬に関しては、ちょうど抗TNF- α 抗体製剤の治験が始まった頃です。ただ、臨床では治療の選択肢が限られ、治療に難渋する患者さんの症状を少しでも良くしようと、試行錯誤が続きました。

振り返れば、そのとき必死で患者さんを治そうとした経験は、今、他の皮膚疾患の治療にも生かされていると思います。治療法が限られている中で工夫する術が、乾癬の治療はもとより、私の診療に対する基本姿勢として培われていったと確信しています。

めざすは、自己完結型クリニック

東大病院で多くの患者さんを診たあとは、いずれ開業することを念頭に置き、美容外科専門のクリニックなどで美容医療全般の経験を積んでいきました。

皮膚疾患と美容医療、両方しっかりと学んだ医師はそう多くありません。大学病院の難治例から美容外科まで、「すべて診た経験がある」ことは私の強みの一つと自負しています。

開業にあたっては、3歳から育ったなじみある松戸市を選び、徐々に診療環境を整えてきました。意外だったのは、手術のニーズが大きかったことです。ほくろ、粉瘤、脂肪腫、基底細胞がん切除などを診るなか、しだいに難しい症例に遭遇する機会が増えていました。

そこで今は、大阪大学形成外科の高田章好教授を招き、美容外科・形成外科外来(月1回)を設けて対応していま





①



②



③



④



⑤

①機能的で洗練された空間の中央待合と受付。②完全防音のキッズルーム。③車椅子のまま入室可能な診察室。診察室は10室あり、医師2~4名で移動しながら診療にあたる。④手術室は2室あり。⑤自由診療専用ラウンジ。

す。私自身、高田教授から高度なスキルを学びとることで、「自己完結できるクリニック」をめざし研鑽を重ねています。

皮膚疾患は「見る」ことが重要

現在、当院の1日受診患者数は300~400名、保険診療が7割で、40名のスタッフで対応しています。駐車場の確保とバリアフリー化の徹底により患者層は幅広く、例えば、0歳児の食物アレルギーを診たあと、90代男性の褥瘡を治療し、その後50代女性のスレッドリフトを行うような日常です。

実は東大病院時代、「なぜクリニックは早く紹介してくれないのか」と嘆くことが多々ありました。しかし開業後、その理由を私なりに理解できるようになりました。開業すると、難しい症例や珍しい症例を診る機会が減ります。そのため、正しい診断を下せないまま、患者さんを抱え込んでしまいかちなのです。

そこで私は現在、月に2回、自身の休診日に東大病院の教授回診に参加し、多くの症例に目を慣らしています。皮膚疾患は、なにより「見る」ことが重要なことです。それは私自身の知識のアップデートはもちろん、患者さんの安心、安全にもつながると確信してい

ます。

かゆみ治療に患者満足度を反映

保険診療のなかで、アレルギー疾患の患者さんが占める割合は高いです。最近ではアトピー性皮膚炎に生物学的製剤が使用可能となり、適応患者さんには積極的に導入しています。

アトピー性皮膚炎に生物学的製剤を使うと、かゆみを中心に改善していく印象です。搔き壊しが減り、残存する発疹にステロイド外用剤を使えば皮膚はきれいになりますから、生物学的製剤を希望する患者さんには、ステロイド併用の必要性を納得してもらってから開始しています。

また、アレルギー疾患のかゆみに対し、抗ヒスタミン薬を処方する際は、患者さんが何を重視するのか、要望を聞いたうえで使い分けています。多いのは治療効果ですね。「よく効くなら、多少眠気が出ても大丈夫」という声が多く、服用中に機械操作などをする可能性がないことを確認するなどしながら、患者さんが満足できる治療をめざしています。

簡単な道より難しい道

2011年に開業して、8年目を迎えます。今後の目標は、「あらゆる面で

現状より上をめざす」ですね。数値目標を挙げるなら、1日300~400名の受診者数を、500名まで引き上げ、診療レベルのさらなる向上も追求していきたいですね。

私はアンドレ・ジイドの小説「狭き門」が好きですが、そのタイトルは新約聖書マタイ伝の「狭き門より入れ」という言葉に由来しています。「簡単な道と難しい道があれば、あえて難しい道を選びなさい」という示唆であり、開業してからの私は、その言葉に忠実に勉強し、診療を行ってきました。

今後も、あえて難しい症例に向かい合い、研鑽を重ねることで、当院を受診する多くの患者さんのニーズに対応できる自己完結型のクリニックであり続けたいですね。



Clinic Data

医療法人社団鐵櫻会 シャルムクリニック

千葉県松戸市秋山68-5

[皮膚科／小児皮膚科／アレルギー科／形成外科／美容皮膚科／美容外科]
<http://www.charme-clinique.jp/>